

病 院 だ よ り

International Goodwill Hospital

「血液浄化・透析センター」の開設について

酒井 政司

アレルギーと炎症の源

中山理一郎

薬剤師って何をしている人？ -その1-

山根 康弘

国際親善総合病院

〒245-0006 横浜市泉区西が岡 1-28-1
TEL 045(813)0221 (代 表)
FAX 045(813)7419 (庶務課)

URL <http://shinzen.jp>

国際親善総合病院看護部
モバイルサイト



病院だより

「血液浄化・透析センター」の開設について

当院では、平成22年5月17日より「血液浄化・透析センター」を開設いたします。

皆様の中には、「透析」という言葉には聞き覚えがあっても、「血液浄化」という言葉に聞きなれない方も多いのではないかと思います。「透析」とは、腎臓の機能が低下した患者さんに対して、体内に蓄積した老廃物（尿毒素）を腎臓の代わりになって除去する治療法を指します。透析技術は、その後医療技術の進歩に伴い、その対象を腎不全患者さんから、体内に蓄積した様々な有害物・毒物の除去に広く応用されるようになり、「血液浄化」療法としての地位を確立していきました。

当センター開設により、急性腎不全患者さんの治療や慢性腎不全患者さんの維持透析・入院中の透析継続を行うことができるようになりました。更には、先に述べた特殊な血液浄化療法が必要な患者さんの治療もお受けすることが可能となり、皆様にさらなる高度医療をお届けすることが出来るようになりました。「近くで・安全で・安心のできる高度医療の実践」を目指して、医師・看護師・臨床工学技士・栄養士・社会福祉士からなるチーム医療を実践していきます。

皆様の、笑顔で元気になっていく姿をみられますよう、そして皆様から信頼していただける病院を目指して、職員一同努力して参ります。

血液浄化・透析センター
センター長 酒井 政司

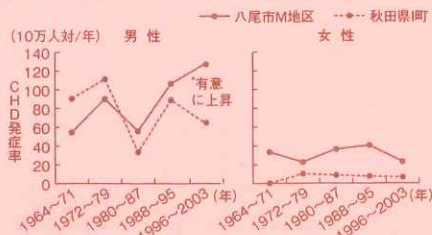


アレルギーと炎症の源

アラキドン酸を増やし、心筋梗塞を減らさない薬？

日本では1980年以降植物油の摂取増加によりアラキドン酸の血液中濃度が増加し、その生成産物であるロイコトリエンがアレルギー・花粉症を増加させています。【右図1】

●CHDの年齢調整発症率の推移(40~69歳)【図2】



CHD: 心筋梗塞+心臓突然死(1980年以降はPCIを含む) *chi-square test, P=0.008
(J Am Coll Cardiol 2008; 52: 71-79より北村氏作成)

アラキドン酸に含まれるエイジン酸(トランス脂肪酸)は取り込まれた細胞壁で壊れた臓器で炎症を起こす(皮膚・気管支・大腸・血管など)血管内皮細胞に取り込まれ、血圧を上げたり血管狭窄を形成したり動脈瘤になったり、内臓脂肪に蓄積しアディポネクチンの低下とインスリン感受性低下から糖尿病発症を増加させます。

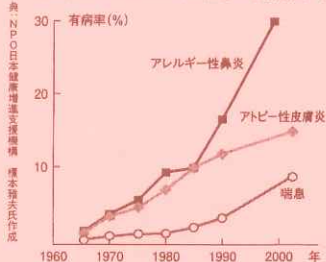
さらに燃え残ったアラキドン酸から生成されたトロンボキサンは血管炎と血栓から心筋梗塞と脳梗塞を発症します。【左上図2】

燃やさないアラキドン酸と壊れた細胞壁から出てきたエイジン酸は油の残骸(レムナント)として善玉コレステロール(HDL C)が結合し、悪玉コレステロール(LDL C)となり胆石やポリープになったり、腫瘍壊死因子(TNF α)・リンパ球に影響を与え癌になったりします。【右下図3】

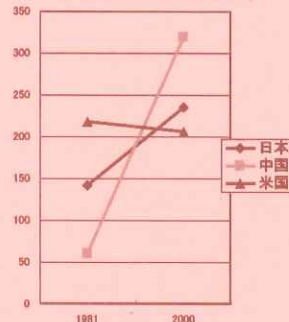
このようなアラキドン酸・トランス脂肪酸の摂取を減らし、油を運動・燃焼すれば、病気の悪循環から離脱できるのですが、安易に軽い薬でLDL Cを下げるとアラキドン酸が増加し、急性心筋梗塞になる患者さんが増えてきました。何に危険な油が入っているか提示します。

内科部長 中山 理一郎

●日本におけるアレルギー疾患の増加【図1】



●危険な油が癌も増加【図3】



ご案内

※開始時間が通常とは異なりますのでご注意ください。

このテーマは

平成22年6月11日(金) 15:30~約1時間の健康懇話会にて

講演予定です。

(入場無料、予約不要、どなたでもご自由にご参加ください。)

薬剤師って何をしている人？ -その1-

現在、医療における治療手段の中で薬物治療の比重は、日増しに大きく、複雑になってきています。このような現状の下、薬剤部では患者さんに安心してお薬を服用・使用していただくために、あらゆる努力をしています。今回、薬剤師が医療の担い手として、どのようにお薬と関わっているのか、当院の薬剤部について、2回に分けてご紹介させていただきたいと思っております。まず今回は、お薬の調剤に係る業務についてご紹介いたします。



調剤業務

当院薬剤部では入院・外来を問わず、全ての患者さんに対して、お薬の使用歴をコンピューターにて管理しています。これにより、お薬の量や飲み方・使用方法・飲み合わせ・アレルギー・重複等を、薬の専門家の立場から瞬時に検討でき、必要があれば医師と協議しています。この後調剤を行い、最終的に別の薬剤師が調剤された薬と処方せんをもう一度総合的に見直し、患者さんにお渡しするお薬としています。このように、ひとりの患者さんのお薬についてたくさんの薬剤師が関わり合いをもち、安全な薬物治療が行えるよう努力しています。



製剤業務

製剤室では、治療に必要であっても市販されていない製剤等について、医師の依頼があれば、適切な製法、用法を検討して病院内で特殊製剤としてこれを作製しております。

また、食事を摂取できない入院患者さんに対して、無菌設備にて高カロリー輸液の調製も行っています。このような患者さんは免疫力が低下している可能性があるため、できるだけ体内への微生物の進入を防ぐため、このような調剤を行います。

更には、院内のがん治療情報を収集管理し、安全な抗がん剤治療の実施にも取り組んでいます。最近のがん治療は、色々な薬を複雑に組合せて使うため、抗がん剤レジメンを確認し、薬剤の投与量・投与間隔等をチェックし、薬剤部にて治療に使用される薬剤の調製を行っています。



薬品管理業務

病院には調剤用、消毒用、検査診断用等様々な薬がありますが、医薬品管理室(薬務室)では、これらの薬の品質管理、在庫管理を一元的に行い、常に患者さんに良質な薬品を提供できるよう努めています。また、ここでは、注射薬調剤の取扱いも行っており、入院患者さんに処方された注射薬について、病棟担当薬剤師が処方内容を確認した後、患者さんひとり1日分ずつ調剤を行っています。

いかがでしたでしょうか。次回は病棟や情報に関する業務を中心にご紹介いたします。

薬剤部 山根 康弘